

COVID-19時代を生きるーグローバル・クライシスと市民社会
第5回パンデミックを生きる指針：復興へ向けた希望のありか

「穏やかな経済」に向けて

2020年5月29日(金)

中山 智香子(東京外国語大学)

今回のオンライン・オープン講座実現の経緯

- Parc自由学校の連続講座

「2020年持続可能な未来への分岐点：グローバル・クライシスと日本の選択」(8月開講、当初は6月開講予定)

の準備中にCOVID-19のパンデミック勃発

: 急遽、COVID-19自体を考える必要性

⇒オンラインのオープン講座へ

確認しておきたいこと

- COVID-19以前から「グローバル・クライシス」は存在

:とりわけグローバル経済と国際社会の矛盾、新自由主義による「公」的領域の予算、人員削減、気候変動にあらわれた「限界」など

⇒SDGs, G.トウンベリさんら若い世代の動き、周回遅れ & 逆向きの日本の政治経済

: COVID-19 = すでにあった問題や傾向をあらわに

: 影響は一様にあらわれるわけではない(格差の構造を顕在化)

: 「元に戻る」、「取り戻す」はNG(不可能かつ望ましくもない=戻っても嬉しくない)

- 「ウィズコロナ」(あるいは「ウィズウィルス」): 特に新しくはない視点だが一

: これまでも感染症の問題(ペスト、天然痘、マラリア、エイズ...)は存在

: グローバリゼーション=異文化、「他者」との接触と感染のリスク(双方向)はずっと存在してきた

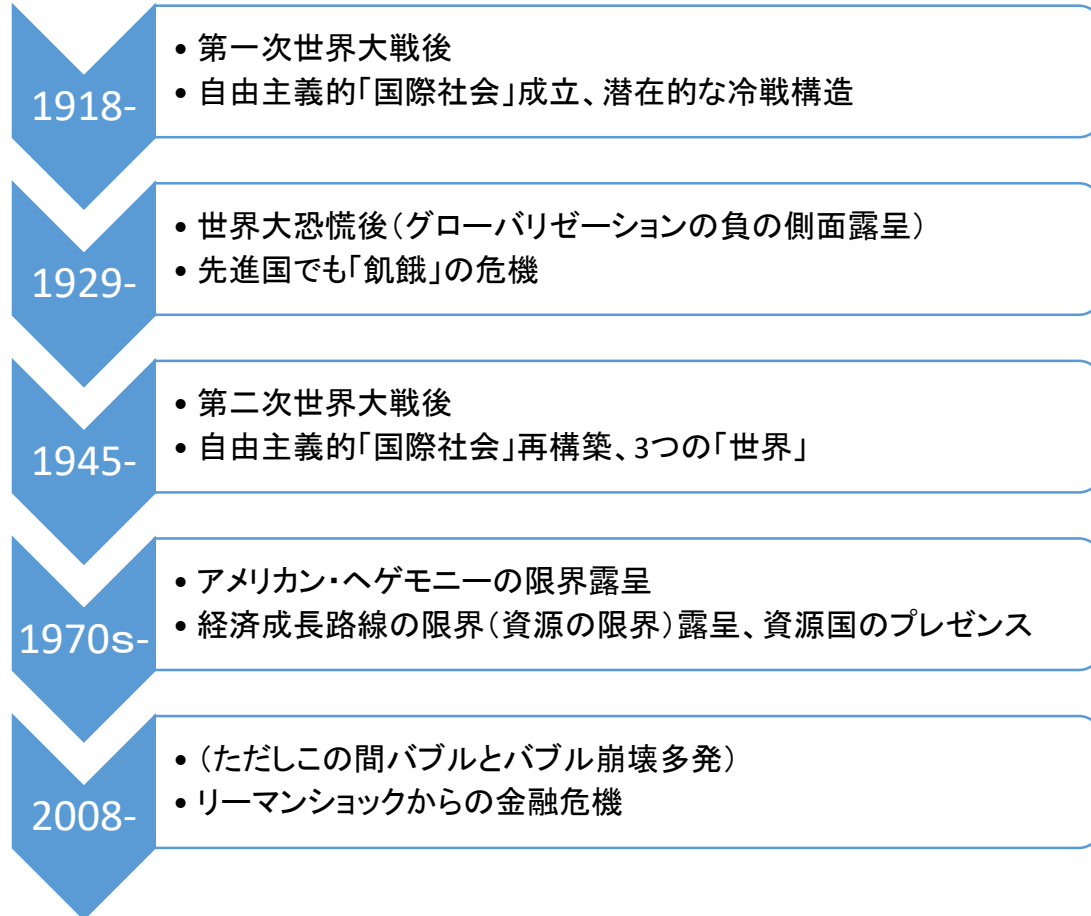
Cf. 中山「グローバリゼーションと経済的危機の位相:コロナショック2020の示すもの」(『現代思想』2020.5)

: 特に今回は中国、欧米諸国等の経済悪化により、世界的大問題と位置づけられた側面あり

Cf. グローバル・クライシスの構造

—特に20世紀の第一次世界大戦後や大不況期の考察から

(詳しくは本講座で！)



グローバルな「危機」に直面
⇒各国は「経済国家」的に対応

(Ex.)

- 戦後復興、戦後開発
- 不況対策(雇用、貧困・飢餓対策、ニューディール)

⇒市民、社会の側も政府に期待

⇒そのことの副作用も

- 「大きな政府」(過剰な抱え込み)
- 強いリーダー(救世主)の期待
- 人びとのあいだに過剰なナショナリズム
- 緊縮の正義、正常なものなどの押し付け

これからの指針:わたしたち市民にできること —「穏やかな経済」に向けて

- グローバル化を推進してきた自由主義的国際経済秩序の見直し
- ヘゲモニー(覇権国)の交替劇が重要なのではない
- 各国単位の感染症対策の比較考量、協調へ(国際政治、国際経済と混同させない)⇒むしろ市民社会の連帯から各国の政治へプッシュ
- 国家に求めるものとそうでないもの(介入されたくないこと)の切り分け

- 穏やかな経済(J. ラスキンの用語から)
- 「この最後の者にも」(「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」。「グローバル・サウス」のパーспекティブ)
- 暮らすこと、住まう live, dwell ことの見直し